
渉り鳥

アカザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渉り鳥

【Nコード】

N4963N

【作者名】

アカザ

【あらすじ】

舞台はシャーム大陸という仮想ファンタジー世界です。

その大陸に存在する「齋の国^{しのくに}」と呼ばれる場所、そこで様々な思いを抱えながら疾走する人たちのお話。

(※ファンタジー、と言いながら剣や魔法の！とは少し毛色が違います……生温かい目で見て下さると嬉しいですよ)

モノクロの始まり

ずきん、ずきんと。

失ったはずの場所が熱を持っている。

それは慢性的な鈍い痛みと、時折刺すような鋭い痛みをもたらす。鈍い痛みは、まだ、良い。慣れてしまえば我慢ができる。

いつ襲ってくるか分からない鋭い痛みは酷く精神を不安定にさせた。お陰で、自分が起きているのか眠っているのかも曖昧だ。

体も、頭も、どこもかしこも泥のように濁って、疲れている。

それでも、笑っていないならなかった。

——いや、強制された訳ではないから、笑っていたかった、かもしれない。

木製のベンチに腰掛けて、空を見る。

モノクロの空。太陽は雲に隠されているくせに、その奥で輝いているのか、空全体が僅かに白く光っている。

本来ならばこの程度の光を眩しいとは思えないのだろうが、身体か、あるいは精神が弱っているのか、明るさに眩暈がした。

座っているから、倒れることはない。

目を閉じて眩暈をやり過ごす。

ざわざわと、微かに耳に届くのは風の音だろうか。

それとも、安定しない自分の呼吸だろうか。

どちらにしても、今は鬱陶しかった。

ふと、だらりと下げていた左腕の袖を誰かが引くのを感じて、目を開ける。

目にかかる前髪が鬱陶しくて仕方ないが、手を上げて払いのけると
いう動作が酷く億劫だった。

結局、頭を振って邪魔な髪をどかすだけに留める。

そうして視線を左腕に落とすと、小さな白い手が袖を握っていた。

「……。」

紫色の大きな瞳が、自分を見上げていた。

やわらかくウェーブした暗青色の髪。

「……。」

見上げる少女は、何も喋らない。

口を結んだまま、目だけで訴えてくる。

彼女の足元に目をやると、地面には木の枝で書いたと思しき拙い字
があった。

『だいじょうぶ?』

それを見たと分かったのか、少女は僅かに首を傾げた。

「……うん、大丈夫」

自分でも驚くくらいの掠れた声が出た。

それでも薄く微笑むと、彼女も微笑を返してくる。

「もう少しだけ休んだら、行こうか、カルミア」
『うん』

地面の『だいじょうぶ?』が小さな手で消されて、『うん』に変わる。

決して口を開くことのない少女。
言葉を発することのできない妹。

『むりは、しないでね にいさん』

慣れた様子で書かれる文字に、俺は。

砂で汚れた、妹の小さな手を取って。
ただ微笑むしか、できなかった。

ミスティックブルーの夜

静かな、夜だった。

月は雲の幕に隠されて、白く光ってはいるが地上までその光を届かせようとはしない。

闇のせいで薄汚れて見える石畳を照らしているのは、等間隔に並ぶぼんやりとした街灯。

とはいえ、弱いランプの光では闇を払うことなんてできない。

足音どころか、虫の声一つしない夜。

帝都ポルターレ。

太陽のある内は賑やかなこの街も、日が沈んでしまえば暗闇に支配される。

昼の間、人通りが多い都な分、その違いは顕著だ。

活気ある街の持つ、もう一つの顔。寂れた夜の街。

「……。」

街灯のおぼろげな光、それを避けて暗闇に潜むように、俺たちは佇んでいた。

弱い灯りに、建物の影が淡く地面に落ちている。

ただ、静かに息をしてこの場にいる俺の、その横に佇む男もまた、同じようにぼんやりと立っている。

この闇の中、細いフレームの眼鏡をかけた彼の目は僅かに細められていた。

長い黒髪を、紺色の布を使って首の左側で緩く纏めている。
それが、静かな風に揺れていた。

俺の暗青色の髪も同じように揺れる。

昼の名残のような、生温かさを含んだ風だった。

俺も彼も、僅かに俯いた格好で、地面に転がるものを見ていた。
かつて動いていたもの——今は動いていないもの。

——地に倒れ伏した男を。

上質の黒い正装服を身に着けている。いわゆる庶民、な俺たちじゃ
手にすることなんて出来ないようなもの。
ただ、その男はうつ伏せになった状態で、背に細長い剣を装飾品の
ように突き立てていた。

「……ねえ、スピネル」

ふと顔を横に向けて、隣にいた男——スピネルに声をかける。

俺の声は自分で聞いても、屍を前にしているとは思えない、普段通
りの声だった。

「何だ？」

「嫌な仕事だね」

俺は静かに笑ってそう言った。

街灯のせいでスピネルの姿がぼんやりと白く霞んで見える。だから
その表情は分からなかった。

「今更か？ もう私達が組んで三年目だぞ」

「んー……そう言ってしまうば、そうなんだけどね」

「チャート、相変わらず余計な考え事が多いな？」

名前を呼ばれた俺は、隻眼を細めて。少し笑ったまま、答えた。

「それでも、ないさ」

足元に転がる軀を見ながら。

「帝都富豪、消去――」

感情の籠らないスピネルの声。

いつもそうだけど、今日みたいな時は特にそうだ。

「完了」

「完了……ね、うん」

言いながら俺は口元に笑みを浮かべていた。

それを見て、スピネルが眉間に皺を寄せる。いつまで経っても直らない俺の癖。

余りこういう場にそぐわないということは、知っているけれど。

「……ごめんごめん」

小さく笑ってそう言うのと、スピネルの眉間の皺が更に深くなった。

「私のようなれなどとは言わんが、どうにかならんのか」

「良いじゃないか、スピネルがそんなで、テルルが元気でさ？俺がこんなならバランス取れるだろ」

何のバランスだ、と言って溜息を吐いたスピネルの横顔は少し疲れ

ている。

俺の冗談のせいでは勿論、無いんだけど、少し申し訳なくなった。

「いやあああああつ!!」

「!？」

唐突に響いた悲鳴に、俺とスピネルは同じような動作で振り返った。振り返ったその視界に入ったのは、ぼんやりと黄ばんだランプの明かり。

その下でこちらを睨むように見ている、白いワンピースの少女。桃色の刺繍とレースのついた裾が、ふわり、と緩い風に揺らいた。

その風が、微かに香水の甘い香りを運んでくる。間違いなく、庶民なんかではない女の子だ。

「——っ、」

くらり、と眩暈に近い何かを感じて、俺は片手で頭を押さえた。正確には、きつく包帯を巻いた、見えない右目を。

暗青色の髪の少女の姿がフラッシュバックする。レースのついたスカートの裾がゆらぐ、後ろ姿。ぼんやりとしたデジャビュ。

耳をつんざく高い悲鳴を上げたまま、少女はその場で固まっていた。淡い月明かりの下呆然と立ち尽くす姿が、俺の記憶の中の少女と重なる。

「……卿には娘がいたっけね、あのくらいの」

「ああ、そう聞いているが」

ここに俺たちがいることなど忘れたかのように、少女は地に伏した男を凝視していた。

何を思っているのか、俯いた顔からは読み取れない。

そうして、父親の軀にふらふらと近付いて。

顔を、上げた。

小さな白い顔。

なぜだか分からないけれど、酷い頭痛がした。

ずきん、ずきんと響くような痛みに、視界がぼやける。

水の膜を通して、少女を見ているような錯覚。

「――っ返してよ！父様を返して！」

少女とは思えない強い瞳で言い放つ。

無言のままそれを見返して、スピネルは袖口に忍ばせたナイフの柄をそっと手に取った。

それに気付いた俺はちら、と視線を送る。

けれどそれを見無視して、スピネルは一步、踏み出した。

石畳に、僅かな靴音が響く。

「っ！」

彼女は早口で何か罵っていたけれど。黙したままのスピネルを見て、恐怖を感じたのか、踵を返してその場から駆け出す。

その動きと一緒に、高い靴音が、静かな街に大きく響いた。遠くなっていく白い背。

まるで対するように、俺の頭痛はずきん、ずきんと鼓動のように強さを増していった。

その小さな背が、ぐらりと傾いだ。

そう見えたのも一瞬で、声も上げずに、少女は地に倒れた。

「……。」

少女の高い声、その靴音、倒れる音、それらがなくなればまた、静寂と暗闇が辺りを支配する。

俺たちが、命を奪うなんて不条理なことをしているのを、虫たちは知っているのかもしれない。

言葉を紡がなくなった二つの軀の上に、ぼんやりとした灯りが落ちる。

「本当、嫌な仕事だね」

「……ああ、そうだな」

ふと同じ言葉を呟くと、スピネルはさっきとは違う返答をした。

俺はそれに少し満足して、その言葉を背に、小さい方の軀に近づいた。

小さな背に突き立ったままのナイフを取るため——だったのだけだ。

うつ伏せた体の横に屈んで、ナイフの柄をぐ、っと強く握る。
刃は、短いくせに深く刺さっているらしく、中々抜けない。
強く掴んだ柄から手が滑る。

一つ息を吐いて、柄を持ち直し、赤黒いワンピースの背に、手をついて。

――後悔、した。

「――っ、」

白いレースのカーテンがかかった窓辺。

沢山のデディ・ベアが置かれたベッドに腰掛けて。

色とりどりの鮮やかな花束、ピンクのリボン。

弾けるような女の子の笑顔。

優しげに微笑む男と女、その声。

三人の楽しそうな会話。

流れていくあたたかい情景。

――頭が、痛い。割れるように。

白い包帯の下、開くことの無い瞼の裏に映るスライド。

幸せそうな風景を前に、俺は右目を押さえて、呻いた。

「チャート？」

「っ……あ、え？……ああ」

背にかけられたスピネルの声に、俺は思わず肩を揺らした。さっきまで目前に広がっていた、幸せそうな風景が、過ぎ去っていく。

代わりに、薄明かりに照らされた灰色の街が、返ってくる。

あんなに酷かった頭痛はもうない。一瞬で消え去った。けれど、頭がぼんやりと霞んでいた。すっきりしない。

「大丈夫か？」

「大丈夫」

曖昧な答えを返しながら、俺は小さな背からナイフを抜き取る。

ついさっき笑っていた顔は、うつ伏せているから見えない。

——見えなくて、良かった。

ずるり、と嫌な感覚が手に伝わる。その感覚に、俺は歯を強く噛み締めて顔を顰めた。

いつまで経っても慣れない。

「……チャート」

「うん」

「能力、使っただろう」

「うん」

「……聞いているか、私の話を」

「うん」

「聞いているいな」

「うん……え？」

屈んだままスピネルを見上げる。

眼鏡の奥の紫色の目は強く俺を見返してきた。

睨んでいる訳じゃない。どちらかというと、心配されている感じだ。

「……これは放っておけば良い。帰るぞ、チャート」

「ああ……うん、ごめん」

「何を謝る？」

「いや、何となく。……謝られて悪い気はしないだろ、気にしないで」

のろのろと立ち上がりながら言った言葉に、スピネルは僅かに笑ったようだった。

リーリィ・レッドの太陽

ぽかぽかとした穏やかな天気の下がり。

高い所にあるお日様の光は、燦々と地面に降り注いでいる。

それは大事に育てた私の植物たちにも分け隔てなく。

私は片手にデフォルメされた象形の緑のジョウロを持ったまま、少し視線を外して太陽を見た。

眩しいから、直に見ることはしない。

楕円形の窓から見るような、眼鏡のフレームに区切られた青い空。

「おい……スート、水もやり過ぎると枯れるぞ？」

かけられた声に振り向くと、赤い刺繍の入った黒色の服を着た男の人がそこに立っていた。

左肩を覆うように金の飾り紐で付けられた白い外套が、風で一度大きくはためく。

明るい外と違って、少し暗い室内に立っている彼は何だか顔色が悪く見えた。

「ああ、多分大丈夫ですよ、強い植物ですしい。」

水少なくなっってひよろひよろになっちゃうよりマシですう」

「いや……ジョウロ傾きっぱなしだけど」

そう言われて、傾いたジョウロから水が出続けていることに初めて気付いた。

気付いた瞬間、中の水がなくなったのか、象は水を放出するのを止める。

水を与えていたエンジェルズトランペットの根元には小さな水溜りができていた。確かにこれはやり過ぎかもしれない。

地面に頭を下げたように咲く白い大きな花が、しょんぼりしているように見えて、少し申し訳ない。

私は慌ててジョウロを地面に置き、今度は横目じゃなくちゃんと彼を見上げた。

ついさっきまで太陽の近くを見ていたからか、橙色にちかちかして薄暗いところは少し見辛い。

「それでー、キアノスさん。何かあったんですかぁ？それ」

彼の手には薄い紙の束が握られていた。私はそれを指差して言う。持っている、じゃなくって握っている。

ぐしゃぐしゃにしたかったのか、何かの拍子にぐしゃぐしゃにしてしまったのかは知らないけれど、

そのレジュメには沢山の皺がついていた。

キアノスさんは外套のボタンを外しながら、一つ溜息を吐く。

「ああ、昨日の報告ついでに、今日の仕事を言いつけられてな」

「んー、今日もお仕事ですかぁー、どんなですか？」

「……帝都の、えーっと……」

皺になったレジュメにちら、と目を落として。

でも諦めたのかキアノスさんは、すぐにそれから視線を外した。

「何とかって名前の貴族だそうだ」

「うふ、キアさん適当ですねえ、いつにもましてえ」

言いながら私は、庭用のスリッパを脱いで室内に入る。

室内に入るまでには二段、小さな段差がある。それを上ると、嗅ぎ

慣れた部屋のおいが私を包み込んだ。
外から見れば薄暗いと思っていた室内、けれどちゃんと電気がつけられている。

キアノスさんを追い越して、部屋の中央に置いてあるソファに飛び込むようにして腰掛けた。

飛び込んだ反動で私の体が大きく跳ねる。

「由緒だか何だか知らないけど、いちいち長ったらしい名前を覚えてられなくてね」

「あ、それは同感ですう。長ければ良いってモノじゃないですよ
え」

勢いよく体を横に倒してソファに寝転がる。ひんやりとした感触が気持ち良い。

寝転がると、キアノスさんの足音が少しだけ大きく聞こえた。

「とにかく、これが資料。気が向いたら読んどけよ」

「はあい……ぐしゃぐしゃですよお？」

「読めんことはないだろ」

——気が向いたら、で良いんだ。

そう思いながら、渡されたしわしわのレジュメを見る。

「うっ……キアさんこれ、読んだんですかあ？」

「一部だけな」

思わず、深い溜息を吐いた。細かい文字がびっしり。

読む気なんて起きない。

「それじゃー私は夜までお昼寝しますうー、ちゃんと起きますから」

キアさんもゆーっくりどうぞお」

「はいはい、俺もそうさせて貰うよ」

外套をハンガーにひっかけて、キアノスさんは長く息を吐いた。

「うふふ、お日様のある内に寝るなんて、ぜーいたくですよねえ」

「……不健康だけどな」

「これで夜も寝られたら、言う事ないですよにねえ？」

「いつ動く気だ？」

ソファに仰向けに寝転がった私を、上からキアノスさんが覗き込む。逆光になって見えにくいけれど、彼は呆れたように笑っていた。

「んー……寝ながらとかですかあ」

私の答えに、声を立てて笑いながら、キアノスさんは踵を返す。

「それは夢遊病って言うんだよ」

とん、とんと彼が階段を上がる音が遠くに聞こえた。階段を上がった中二階に、私と彼の部屋がある。

その音を聞きながら、私は横になったまま灰皿の上でレジュメを燃やした。

私もキアノスさんも使わないから、ピカピカの灰皿。

パチパチという小さな音と共に、少しの煙が上がった。

読んでないけど、何とかなるだろう。

レジュメが綺麗に灰になったのを見て、私は眠るために目を閉じた。そういえば中庭の戸を閉める音が聞こえなかったなあ、無用心だなあ、とかどうでも良いようなことを考えながら。

カントリーブルーの森

さらさらと、静かな葉擦れの音が聞こえてくる。

心地良い温い風が、大きく開け放たれた窓からゆったりと入り込んできていた。

古の深い森。

樹々の一本一本が空を掴むように大きく伸びている。

それでもどこかから陽光が差し込むらしく、下生えの中にはひよろりとした細い木も見られた。

その森の中、白い壁に白い屋根のこの屋敷は、ひっそりと存在していた。

屋敷のある付近だけ木が刈られ、大きな屋敷を中心に更に大きく開けている。

住人の性格を表すかのように、草や垣根代わりの樹木も綺麗に刈り込まれていた。

深い森を通り、外からこの白い屋敷に辿りつくまでの道は一つしかない。

口では医者だと言いながら、ここに至るまでの道を知っている一握りの人間の治療しかない不真面目な男の住まい。

そんな屋敷の中で、俺はぼんやりと窓の外を眺めながら、箸を動かしていた。

二階にいるから、窓の外は緑一色。

「相変わらずですわねえ……大食漢」

「能力、使うと疲れるんだよねー、で疲れるとお腹空くんのだ」

「それ毎回聞いてますわよ。そろそろ使いこなせるようになりませんか？」

「そうになると俺も楽なんだけどね。……あ、白鷗、おかわり」

溜息を吐きながらもしつかりと料理と持って来てくれる白鷗の背を見ながら、違う皿を手取る。

何となしに彼女の背中を見ていたら、なぜか白いワンピースの背が重なって、俺は慌てて目を逸らした。

大きな木製のテーブルの上には、その表面が見えないくらい沢山の皿が並べられていた。

既に俺が空にしたものもあるけれど、殆どに様々な料理が乗せられている。

全て白鷗のお手製。彼女が料理好きで良かったと心から思う。

同じテーブルについているスピネルとテルルも箸を動かしてはいるけれど、多分平らげるのは殆ど俺。

「……ってかさ、いくらなんでも食いすぎじゃね？腹壊すよ」

「俺が腹痛とか……」

「なったこと無いの知ってるけどな！」

トマトソースの絡んだパスタをくるくるとフォークに巻きつけながら、テルルが言う。

空いた左手で頬杖をついている。

「テルル、行儀悪い。……枳殻がいたら怒られるよ」

「いないからいいの。っつかチャートもどっこいどっこいだと思うけど？」

「え……そう？」

「その山積みの皿!」

テルルがフォークで指した先には、十枚や二十枚どころじゃない数の皿が重ねられている。

食器を洗ってくれる白鷗に悪いな、と思いつつも、残すよりは良いかと思いつながら俺が開けた皿。

「あー、うんうん。これは仕方ないよ」

「どこがだよ……」

「よく妹にも怒られた。……今よりもマシだったはずなんだけどもあ。能力は四年前からだし」

スプーンを乗せたスプーンを口に運びながら言う、テルルはぽかんと口を開けて俺を見た。

「あれ……お前、妹いるんだ? いいのかよ、こんな所にいて」

「うん、いたよ」

「いた?」

「うん」

首を傾げて、そのままの格好で固まるテルルを横目に、俺は次の皿に手を伸ばす。

横で、コーヒークップを片手に持ったスピネルが静かに言った。

「テルル、お前は相変わらず察しが悪い」

「……なんだよ、知ってるよそんなこと」

「改善しようとは?」

「したって出来ないのはスピネルが一番わかってるだろ!」

スピネルとテルル、この二人は兄弟だ。

なのになぜか、テルルは兄のことを名前で呼んでいる。

兄弟らしい会話は、殆ど——というか全く、聞いたことがない。まるで気の置けない友人のよう。

いつか、テルルに聞いたことがあった。どうしてスピネルを兄と呼ぶはないのかと。

そうしたら、テルルはなんでだろう、と言って笑った。

誤魔化されたのは分かったけれど、それ以上は何となく聞けなかった。

だから今でも、その理由は、分からない。

「はい、これで最後ですわよ」

次々とテーブルに料理を運んで——

キッチンに戻るときには山積みになった皿を持って——いた白鷗が、そう言いながら椅子に座った。

「うん、有難う」

笑ってお礼を言うと、彼女は深く溜息を吐く。

困ったように眉根を寄せているけれど、口元は笑っていた。そのことに少し安心する。

「あなたが素直で良かったですわ。いくら料理好きでも、お礼の一つも無かったらこんなに作ろうと思いませんもの」

「……うん、本当に感謝してるよ？白鷗にも枳殻にも」

「そうですねえ。あなたたちが来るたびに貯蔵庫空っぽですもの。」

枳殻にまた買い出しに行って貰わないといけませんわ」

その言葉に、スピネルが驚いたように白鷗を見た。

「前々から不思議だったのだが……枳殻が行っているのか。目立つだろう」

「ええ。私は余りここから出ませんもの。」

両手に五つも六つも買い物袋を持った枳殻は……目立ちますわよねえ、きっと」

言いながら白鷗は肩を震わせている。

今ここにはいない、家主のことを考えて少し申し訳なくなった。

彼が苦勞して買いに行った食料を俺は一時足らずで平らげていた訳だ。

「あいつが……買い物袋……うっわ、似合わねえ」

「それで何故この場所が知られんのか不思議だな」

「今度ちゃんと枳殻にお礼言っとかないと……」

俺たちのてんでバラバラな呟きを聞いて、白鷗は唐突に笑い出した。肩が震えていたのはどうやら、笑いを堪えていたかららしい。

「うふふ、冗談ですわよ……！流石にそこまでしてませんわ！」

「つでえ！冗談かよ！」

「あー……良かった。そうだね、悪目立ちするもんね……」

少し罪悪感が薄らいだ。……まあ、少しなんだけど。

白鷗の盛大な笑い声を聞きながら俺は一つ息を吐く。

安堵の息、に近いそれ。

からかわれたことに膨れているテルルと、微笑笑しているスピネル。

——ああ、何か良いなあこういうの。平和で。

薄暗い街の、灰色の地面に横たわる白いワンピースが、遠のいていく。

自然に、口元に作り物じゃない笑みが浮かんでいた。

「ああ……家主のお帰りのようだな」

言ってスピネルが、木目の鮮やかなドアに目をやった。

ドアをはさんで向こう側に、先程まで話題の中心になっていた彼がいる。

その穏やかな性格を反映するかのように、ドアノブはゆっくりと回されて。

カチャリ、と、小さな金属音が響いた。

ダークレッドの空

コンパスで丁寧に描いたような丸い月が、漆黒の空に浮かぶ、綺麗な夜。

雲が出ていないから星も光っているんだろうけれど、月の強い光に隠れて、ただ真っ黒にしか見えない。

その綺麗な月を、私とキアノスさんは帝都ポルターレの石畳の上を歩きながら見ていた。

月が、太陽に照らされて輝いているなんて不思議。あんなに眩しく光っているのに。

鏡のように陽光を反射している、月。

——じゃあ太陽の光が黒くなれば、月は黒く輝くのかな。なんて、他所事を考えながら。

整備された街灯。それよりも明るい月。

「なんだか夜なのに明るいですねえ……黒い服、逆に目立っちゃいますう」

「満月だ、仕方ない。街灯を消すと仕事が増えるしな」

「そうですねえ、……ああ、でも白い服のが良かったかもしれないですう」

「白いまま帰れるのか？」

「大丈夫ですよお、余裕ですう」

笑って言うと、キアノスさんは疑わしげな目を向けてきた。口元がちょっと笑っている。信用されてない。

——冗談じゃないんですけどお。

普段冗談ばかり言っているからか、たまに、信じてもらえない時がある。

何だかそう言うお話があったなあ、と思いながら、私は話を続けた。

「それにしても、やあーですねえ、こんな雑用、他の人にやらせば良いんですよ」

「雑用ね、そう言うけどそれなりに重要な仕事だ」

「そう思ってるの世界でキアさん一人ですう。そのキアさんも、それなり、なんて言うんですもおん」

「……そう思わなかったら虚しいだろ」

「……そーですけどお」

膨れて言う私に、キアノスさんは苦笑して続けた。

「仕方ない。帝国だって焦ってるのさ」

「何をですかあ？」

月——というよりは、見えない星——を見上げるキアノスさんの横顔。

頭の左横、耳の上辺りで一つに結ばれた髪は空と同じ漆黑。

髪形だけ見たら女の子なのに。失礼な言い方だけど、童顔だし、背もそんなに高くないし。

なのに私より三歳も年上なんて、不思議。

そんな事を考えながら歩いていた。

帝国の石畳の上を。

帝国、と普通誰もが呼ぶけれど、本当の国名は「齎の国」。

齎の国・隔の国・環の国・冰の国と、シャーム大陸四大国家の筆頭として挙げられる。

「殲滅戦の皺寄せの対処ってとこ」

強大な軍事国家であるこの国は、沢山の戦争を勃発させている。小競り合い程度のものから、一つの国が無くなるくらい大きなものまで。

齎の国の歴史は、争いの歴史。

齎の国から見て南西の位置に、燐の国という国家がある——あった。かつてシャーム大陸全てを統べたという、神話の国・壱の国の流れを汲むらしい古い国。

それが四年前、この国と氷の国の連合軍によって地図から消えた。連合二つの国とは比べ物にならないくらい長い間、存続してきた燐国王家、

その人たちはもう一人としてこの世にはいない——らしい。

だからか、帝国は燐の国の滅亡したあの戦争を、『殲滅戦争』なんて名付けた。

その名前を考えたのは総帥か、その近くにいる人たちか、それとも民衆なのか、私は知らない。

ただ、歴史は勝った人が作る、という言葉は本当だなと思った。

「そ、ですか……終戦、四年も前ですのに？」

「未だに旧燐国領は上手く統治できていないらしい。当然といえば当然か」

「ふうん……」

曖昧に返答をしながら、私は右足で強く地を蹴って、跳躍した。黒い影が、灰色の石畳に長く長く伸びて、消える。

とん、と小さな音を立てて、ある屋敷をぐるりと囲む石壁の上に着

地した。

続いてキアノスさんが靴音を立てずに私の横へ着地する。

裾の長い彼の服が、本人に遅れて、重力に従う時に一度だけ音を立てた。

着地したままの、片膝をついた格好でキアノスさんは石壁の下、正面、上、と視線を滑らせる。

「こんな面倒なことしなきゃいけないなら、やらなきゃいいですのにねえ」

私も同じように視線を動かす。

それなりに手入れされた芝生。大きなお屋敷の壁は明るい灰色で、窓が数え切れないほどあった。

窓の数を数えようとして、五つ目で馬鹿馬鹿しくなって止める。灯りの消された窓は暗く、カーテンが何色かまでは分からない。

「……ま、起こしてしまった事を言っても仕方ない。これからだな、問題は」

「うふふ、キアさんのそーいう前向きな所大好きですよお」

「そりゃー、どうも」

言ってキアノスさんは立ち上がった。何かの目星がついたんだろう。実を言うと、昼間読まずにレジュメを燃やしてしまったから、何をしに来たのかいまいち良く分からない。

——まあ、良いや。考えるのはキアさんに任せよう。

楽天的なのは良いことだね？ そう思いながら私は、腰のベルトに差した愛剣の柄に右手を置いた。

「行くぞ、スート」

顔は正面を向いたまま、視線を私に向けて。
いつもよりも低い声。

「切り替えろ」

「了解」

その言葉と共に、私たちは石壁から芝生の上へ降り立った。

靴音は、立たない。柔らかい草が吸収してくれる。

そのまま音を立てずに、灰色の屋敷に近付く。

石壁の黒い闇から出ると、月の光が芝生の上にくっきりと私たちの影を落とした。

明るい。

屋敷の裏から入ったから、ここは中庭だろうか。

余り背の高くない木や、花をつけた植物などがあちこちに見える。

その中に一輪、大振りな白い花があった。

白い月明かりに、白い花がぼんやりと光って見える。

背景の石壁は影になって黒い。そのせいか花自体が淡く発光しているように感じられた。

透き通った月の光が、この世界に干渉したくて、欲しくて作った身体、みたい。

（――綺麗……）

私はのろのろと、灰色の壁に背を向けて、魅入られたようにその花に近付いた。

少し先端の尖った小さな花びらが、何枚も何枚も重なっている。

その姿は、まだ咲ききっていない中心の蕾を守るようにも見え、その蕾を飾り立てているようにも見えた。

良く見ると、花卉はちゃんと段違いになっている。

まんべんなく陽光を――月光を受けるためだろうけれど、私にはそれが、

花が自分を一番美しく見せる方法を知っているように、見えた。

私はその、透けるように白い、だけどしっかりとした厚みを持った花に手を伸ばして。

ゆっくりと、手折った。

ぽきりと小さな感覚が指に伝わる。

――これで、この輝いていた花を殺したことになるのかな。

「スート」

静かな声に、私はゆっくりと振り返った。

「帝都は安全だと勘違いしているらしい。無用心にも窓が開いていた。そこから――」

侵入する、と言いたかったらしいキアノスさんの言葉は中途半端に途切れた。

私の持つ花を見て、首を傾げる。

「ダリアに毒は無いぞ」

「毒草しか興味無い訳じゃないですう。……これ、ダリアって言うんですか」

「そう。……摘んでどうするんだ？それ」

「うふふ、そーですねえ……家にちょっと欲しい気もしますけどお」

言いながらキアノスさんを追い越して、彼が開けたのだろう窓の、
枠に両手を掛けた。

そのまま体重を移動させて、頭から中に飛び込む。

「手向けのお花です」

空中でくると、前転するように身体を回転させて、地に足をつけた。

窓が広くてよかった。狭かったら足が引かかってしまう。

窓枠を掴む前に腰のベルトに挟んでおいたダリアは、落ちずにちゃんとそこにあった。

それを確認していると、不意に空気が流れた。

室内の少し冷えた空気と、外の生温いそれが混ざり合う。

気付けば、私の横にキアノスさんの姿があった。

「毎回飽きずに良くやるな。……家主は三階の西側の部屋だ、行くぞ」

窓から入る月明かりに照らされたキアノスさんの横顔には、程よい緊張感がある。

かちかちになっている訳じゃなくって、だからといって緩んでいる訳でもない。

程よい緊張感。少し張り詰めた空気。

これで気温がもう少し低かったら最高なのに。

そう思いながら、音も立てずに先に行くキアノスさんの背を、私は静かに追いかけた。

「なんだあ……騒ぎどころか警報装置の一つも鳴らないなんてえ、平和ボケしてるんですかねえ」

「帝都は安全だと思っっていたんだろう？」

「ああ、マヌケな人。張り合いませんう、これじゃホントに雑用ですよお」

「……何事も無かったならその方が良いだろ。引き上げるぞ」

「はあい」

返事をしながら、剣を引き抜いた。

布団に挟まれた、この家の住人の体をベッドに縫い付けていた細身の私の愛剣。

銀色の刀身が今は赤く曇っている。

使う人の無くなったシーツの端で血を拭って、剣を鞘に戻した。

カチン、と小さな高い音が響いた。

「それじゃあさようなら、私たち帰りますねえ」

赤く染まった胸の上に、さっきの白いダリアを置いて。

私は部屋の入り口で、腕を組んで待っていたキアノスさんの方へ歩を進めた。

「ホラ、大丈夫だったじゃないですかあ」

「……何が？」

「白い服のが、って話ですう」

「ああ……そうだな、でも」

レースのカーテンを通して月の光が差し込む、薄暗い廊下。

キアノスさんはカーテンを開け、大きく窓を開け放った。

「……でも？」

「帰るまでが仕事だろ」

言いながら。キアノスさんは窓から身を乗り出して、高く跳躍した。少し遠い地面の上に、薄く彼の影が落ちて。

一瞬空中に留まったように見えたキアノスさんの体は、重力に従って落ちていく。

大きく服をはためかせながら着地した彼を見て、私は小さく笑った。

アシードブルーの会話

カチャリ、という小さな音と共に、ゆっくりと扉が開かれる。窓を開け放っているはずなのに、室内と廊下では違うらしく、少し冷えた空気がドアを開けた人間よりも先に入ってくる。それはすぐに室内の空気と混ざり合って、同化した。

「おかえりなさい枳殻。『渉り鳥』が来てますわよ」

白鷗がそう声をかけると、律儀に振り向いてドアを閉めていた彼は笑ったようだった。

綺麗に纏められた、薄い色の長い髪が揺れる。

「では貯蔵庫は空で御座いましょうねえ……ついでは言え、買ってきて良う御座いました」

くすくすと笑いながらこの屋敷の家主――枳殻は俺たちを見た。その言葉通り、片手には野菜と思しき物の入った、ピンクの袋を二つほど提げている。

物凄く申し訳無いけれど、人参の葉を覗かせたピンクの袋を持つ彼はなんだか滑稽だった。

「え……冗談じゃなかったのかよ。しかもピンク」

袋を指差して言うテルルに、枳殻は困ったような笑みを向けた。

「私にこの色は似合いませんよと再三言ったのですがねえ……白は

聞いてくれないので御座いますよ」

「見た目可愛くないんですもの。せめて持ち物くらい可愛くすべきですわ」

枳殻から袋を受け取って、白鷗はキッチンへ向かう。

どこまでが冗談なのか分からない。

「ですから、私に可愛らしさというものは必要ないのでは……」

「良いんですよ!」

キッチンからの返答に、仕方ありませんねえと枳殻が呟く。

この二人は、いつ見てもこんな感じだ。

テルルは大笑いしているけれど、俺やスピネルは慣れたもので、いつも紅茶のカップを片手に二人の会話を聞いている。

「それにしても」

言いながら枳殻は椅子を引いて、腰掛ける。

「貴方がたが来られているとは。言って下されば出掛けずにおきましたものを」

「いや、朝から押しかけたんだし……白鷗には怒られたよ」

「ってか、こんな時間にお前が出掛けてんの珍しーよな。まさか本当に買い出しじゃないだろ?」

深緑色の瞳をすうつと細めて、枳殻は笑った。綺麗な笑顔。

そういえば、眼鏡の奥のあの目はいつも笑っている。

「ええ、少し野暮用を。スピネルに怒られて仕舞いそうなので、言いませんがね」

「帝国の者を診に行ったか」

黙っていたスピネルが、視線だけを枳殻に向けて言った。
いつものことだけれど、声からは感情が余り読み取れない。

「秘密という事に致しましょうかねえ」

「秘密……って秘密にする時点でバレバレじゃん」

「おやテルル。いつの間にか聴くなりましたねえ」

「子供扱いするな！」

立ち上がって怒るテルルに、枳殻は穏やかな笑みを向けた。
あの微笑み。枳殻の得意技、必殺笑顔、と勝手に呼んでいる。あれを向けられるといつも反論する気が失せる。

それはテルルも同じみたいで、大きな溜息を吐きながら椅子に座り直していた。

「それでチャート」

「ん？」

にこりと笑って、枳殻は俺を指差した。俺を、というより俺の右目を、の方が正しいかもしれない。

包帯の下に隠れた、光を映さないガラス玉。

塞がった瞼の上に走る傷のせいで、瞼が開くことは無い。

「大丈夫で御座いますか？」

「ああ、うん」

「毎度言っておりますが、無理をなさいませんよう」

今でも完全には治りきらない古い傷。

それを診る医者としての顔で、枳殻は言った。

「……最近はしてないつもりだけど」

「顔色が余り宜しくないようで御座いますか？」

「ああ、うん、それはちょっと、昨夜ね」

「それを無理と言っているので御座いますがねえ」

小さく笑いながら彼は立ち上がる。

癖なのか、片手で眼鏡のフレームに触りながら。

「目の事では無いようで御座いますし。邪魔者は退散すると致しましょうか」

「邪魔……って何言ってるだよ、お前も一枚噛んでんのに。しかもこの家お前の」

「私は両方に、で御座いますしねえ……スピネルの無言の圧力が怖いので」

その言葉に俺はちら、とスピネルを見たけれど、彼は黙したまま枳殻を見ていた。

深い紫色の瞳は静かで、無感情と言っても良い。

「日が沈んでからだけで御座いますよ、私が『渉り鳥』に援助出来ますのは」

「……今時お前のような奴は珍しい。入れ込めば大抵どちらかに情が移るものだが」

「おや。それでは私が冷血漢のようでは御座いませんか」

「褒めたつもりだ」

「ふふ、そういう事に致しておきましょう。……それでは、私は自室におりますので」

そう言って枳殻はまた、几帳面に椅子を戻し、ドアをきっちり閉め

て出て行った。

彼の部屋は三階の、丁度この部屋の真上にあたる場所にある。何度か入ったことがあるけれど、本とか薬品とか、俺には良く分からないものだらけだった。

「私は明るい内からでも手助けしますわよ?」

淡い桃色のタオルで濡れた手を拭きながら、白鷗がキッチンから顔を出した。

「帝国は気に入りませんもの」

「有難う、白鷗。……洗い物も」

「ほんっと大量でしたわ。私の白魚のような手にあかぎれでもできたら、治して下さいますの?」

「それは俺らじゃなくて枳殻に言った方が早いんじゃない? あれで一応、医者だろ?」

テルルの言葉を無視して、白鷗は椅子に座る。さっき枳殻が丁寧に戻していった椅子。

座って一つ溜息を吐いた後、彼女はテーブルに両肘を置き、頬杖を置いてスピネルを見た。

「前から思っていましたのよ」

「何だ?」

「枳殻のやり方、気に入らないの?」

くいつと首を傾げて彼女は問う。

スピネルは相変わらぬ静かな目で見返して。

「医者として怪我人を診ている訳だ、問題なからう?」

我々と帝国と、双方に手を貸すやり方は悪戯に争いを長引かせているようにも見えるが」

「そういう事じゃありませんわよお」

眉間に皺を寄せて、白鷗は言った。

「私、枳殻が大好きですもの。もし『渉り鳥』が……

じゃないですわね、あなたたち兄弟が脅威になっては、と思ったんですのよ」

「……どうしてそうなる」

「あら？ 違うんですの？ ……てっきり私、あなたが枳殻の事疎ましく思ってると思ってましたわ」

頬杖をつくために立てていた肘をぱたりと前に倒して、彼女は驚いたようにスピネルを見た。

「感謝はしていても、疎ましく思う理由が無い。……それより今の話どこまで冗談だ？」

「九割くらいは冗談ですわ」

「一割は本気かよ！」

にこりと笑った白鷗に、瞬きも忘れて二人を見ていたテルルが、脱力してテーブルに突っ伏した。

冗談にここまで綺麗に引っかかるのは多分、テルルだけだと思う。だから白鷗の話の半分が冗談になるんだけど。

「ま、チャートがそこにいる間は安心ですわねえ」

「その言い方……なんかな、俺保険みたい……」

「あら、事実ですよ？ あなた、枳殻を斬れますの？」

「……いや、無理かな」

「ほら。……で、最近どうなんですか？『渉り鳥』は」
「芳しくないな」

スピネルが苦い顔をして言った。

全く、普段表情の変化に乏しいのに、どうしてこういう顔だけは出来るんだろう。

ぼんやりそう思いながら俺はスピネルを見ていた。

——『渉り鳥』。

それが、俺たちの名前。たち、と言ってもここにいる三人なのだけれど。

ここ齎の国は自他共に認める軍事国家、らしい。

らしい、というのは俺が他の国の現状をあまり知らないから。

多くの争いを売り、買い、他国を力でねじ伏せてきた国。

折り重なる歴史は、戦争の数以上の悲しみと憎しみを生んだ。

そんな負の歴史の流れは、多くの歪みをも生み出す。

その歪みの一つが、俺たち『渉り鳥』。

「だよなあ、昔みたいにもっと大きい仕事したいんだけど」

「最近は動きにくくなった。調子に乗って暴れるなよ、テルル」

この、静かに言葉を紡ぐ男が俺たちのリーダー。

強大な齎の国——帝国の意に従わない、反帝国組織。

六年前に勃発し、四年前に終結した『隣りの国殲滅戦』、それによって俺たちのような組織は爆発的に増えた。

家族や友人を奪われた者、自身の体の一部を奪われた者、などその境遇は人によって様々だけれど。

本来帝国に順風であったはずのものは逆風で、戦争に踊らされた俺たちには順風だったらしい。

「分かってるよ！」

言って横を向くテルルに、俺は小さく笑った。

開け放たれている窓からゆったりと入り込んでくる風は温かい。

それは、光を奪われた過去、光の照らすことの無い行き先、そんな物を持つ俺たちにはそぐわない温かさだった。

ペールレッドの昼下がり

朝。……というよりは、お昼。

昨日の夜から開けっ放しにしたままの窓。そこから入ってくる空気の匂いが、そう告げている。

カーテンも開けているから、ベッドの上にダイレクトに陽光が差し込んでくる。

それが鬱陶しくって、私は頭から毛布をかぶった。

そうすると、もう太陽の光は届いてこない。

一度目を開けたはずなのに——それとも、開けたからか——瞼は重い。

もう一度寝直そうと思って、ゆっくりと目を閉じる。

そうすると、こん、こんとドアをノックする音が耳に届いてきた。

「うー……」

この家には私とキアノスさんしかいない。

ノックした人が誰かなんて、確かめなくたって良い。

「スート、入るぞ」

「……乙女の寝起きですう、遠慮してくださいよお」

「……まだ寝てたのか……」

呆れた声を聞きながら、私はのそのそと起き上がる。

手足を大きく伸ばしてのびをすると、勢い良く放り出した足が毛布に当たった。

ぼさり、と鈍い音を立てて毛布が床に落ちる。

陽光が当たっているから、埃が僅かに舞い立つのがキラキラと光っ

て見えた。

「んんー……で、何のご用ですかぁ？」

「昨日の報告。昼のうちに引っときたいんだけど」

閉めたドアの向こう側で話しているから、届いてくるキアノスさんの声はくぐもっている。

「ええー、いやぁーですう……お日様の昇ってる内からなんてえ、お肌に悪いですう」

「日光に当たaranさ過ぎるのも問題だと思うぞ」

「知ってますけどお……」

サイドテーブルから櫛を取って髪を梳く。肩につくくらいの黒い髪。

寝相が悪かったのか、酷く絡まっている。

苦戦をして梳いた後は、二つに分けて低い位置で結んだ。

「やっぱ、ヤですう、面倒ですしい……次でいーじゃないですかぁ」

私は昨日の夜、適当に畳んでおいた服を手に取りながら言う。

服を広げてみると、少し皺になっていた。

手のひらで軽く叩いて皺をとるけど、途中で面倒になって止めた。着る前に皺を伸ばしてたって、着てたらすぐに皺になるし。

「……なら俺が一人で行くか」

「あー！それはダメですう！私も行きます！」

「ほら、どうせそうなるだろ？」

「……良いですよお、すぐ仕度しますから下で待ってて下さい！」

「了解」

その言葉と共に、キアノスさんの規則正しい足音が遠ざかっていく。それを聞きながら一度ベッドに飛び込んで、大きく溜息を吐いてから。

二度寝の睡魔が襲ってくる前に、私は仕度を始めた。

とん、とんと音を立てて階段を下りると、キアノスさんは中庭に降りるための小さな段差に腰掛けて庭木を眺めていた。膝の上に片肘を立てて、頬杖をついた横顔は、陽光を浴びているのに白い。

夜を生きる人間の証拠。

……でも何だか、癪だった。

「キアさん、休日のパパみたいですよ」

「未婚の父親にする気か……」

「子供と遊んだ後一人で疲れて、歳を感じるキアさん……うふふ」

「うふふじゃない……」

溜息を吐いて言うキアノスさんに、私はコートの裾の皺を伸ばしながら聞いた。

「こんなお昼間から、本部に『陽炎』はいませんよねえ、まさかあ」

「まさか。日の昇ってる内に動くような奴等じゃない」
「ですよ？ですよえ、じゃあ良いですよ」

座ってるキアノスさんの横に立って、私も庭を眺めた。
庭、と言っても余り広くない。

梔子の大きな木と、エンジェルズトランペットが一本ずつある以外は、皆背の低い花ばかり。

キアノスさんが水をやってくれたのか、エンジェルズトランペットの大きな葉っぱの上には水滴が乗っていた。

「……何かあるのか？」

「別に、無いですけどお。何かあの人たち怖いんですもおん」

「一応同僚だぞ」

その言葉に、私は顔をしかめた。

「一緒にされたくないです」

「そんなに嫌いか？あいつ等」

「嫌いです」

「……そ」

多分不思議に思っているんだろう——顔に出てる——キアノスさんは、それでも深く追求しないでくれた。

上手く説明は出来なかっただろうから、私にとってこの素っ気無い返答は凄くありがたい。

こういう細かいところに、気がついてくれる。

そんな人だから、一緒にいられるんだろう。

親帝国組織、『黒夢』として。

レイクブルーの屋敷

穏やかな天気の後。掃除の行き届いた廊下には、窓枠の形の四角い影が淡く落ちていた。

薄い桃色のカーテンが、リボンで窓の端にまとめられている。

この屋敷にあるものは桃色が多いなあと、思いながら、俺は窓の外を眺めていた。

木で作られた窓枠は、陽光によって僅かに温まっている。

それに片腕を乗せて、もたれ掛かるような格好で。

斜めの視界には、緑の鮮やかな下生えと、地面の露出した細い道が映った。

それをゆっくりと目で辿っていたけれど、一階から見ているため、道はすぐに木々に隠れて見えなくなる。

つい一時間ほど前、スピネルが帝都に戻るために通って行った道。

——昨夜の事もある。状況も変わってよう……好転していれば良いが。

情報収集、だったっけ。いつもどおりの抑揚のない声でそう言っていた。

枳殻の屋敷を内包する、この森を通るただ一つだけの道。

緑の鮮やかなこの森の中心には、大きな湖がある。

あまりの深さに、水の色が濃い藍色に見える綺麗な湖。

その底には、水草の生えた石門や尖塔が沈んでいる。

普段それが見えることはないのだけれど、時間帯や角度によって、蜃気楼のように古王国の姿が見えることがあるらしい。

この場所は、旧隣国の領土だったからか、古王国・壺の国の遺跡が

あちらこちらに残っている。

だからか、枳殻の屋敷や湖も全て含めて、この森一体を『王の森』と呼ぶ人もいる。

遺跡、と言っても石の階段や元は白かっただろう柱が苔と草に覆われているというだけで、

知らなければただの岩でしかない。

それでも何か思うことがあるらしく、テルルはよくこの遺跡を眺めている。

今も、暇だからと言って屋敷の裏にある湖を見に行った。

きっと俺と同じように、どうでも良いことをぼんやり考えながら景色を見ているんだろう。

そういうことをしていると、いつの間にか時間が過ぎていたりする。

今も、そう。

「全く……」

どこかから、白鷗の声が聞こえてきた。

「これで、幾つですか？ 貸し……」

何となく気になって、俺は声のするほうへ足を向けた。

誰と話しているんだろう。

枳殻は三階の部屋だし、テルルは裏の湖。スピネルは街で……この屋敷には他に人はいない。

独り言、だろうか。——白鷗は俺より結構年上だけど、ボケるには早い気がする。

俺のいる廊下の突き当たりに、日持ちする食料なんかを置いている、倉庫のような小さな部屋がある。

細くドアが開いている、そこから白鷗の声が聞こえてきていた。

廊下はコの字型になっていて二つの通り道があり、多分彼女は俺がいるのと違う道で来たんだろう。

――流石に、真後ろを通ったなら気付くだろうし。

「……よしみて言っても限度がありますのよ……？」

言葉の後に溜め息が続く。

生まれつきらしいけど、白鷗は余り耳が良くない。

だからいつも、聴覚を補うために、耳に白くて四角いイヤホンのようなものをつけている。

どういう仕組みかは教えてもらったことは無いけれど、

それをつけていると普通か、あるいはそれ以上によく聞こえるんだそう。

彼女の癖で、苛々している時はイヤホン

――前に枳殻が、『フィント・センソ』という名前だと教えてくれた――を爪先でよく叩いている。

今もその、こつ、こつという小さい音が聞こえてきていた。

「……全く、世話が焼けますわ。教会にいた頃とは違いますのよ？」

少し開いていたドアをそっと押すと――そういうつもりは、無かったのだけれど――音を立てずに開いた。

よく手入れされている証拠、だけれど、何となく気まずい。

白鷗はドアの正面、こちらに背を向け、窓の外を見ているようだった。

食料が入ってるんだろう木箱が、綺麗に整頓されて並べられている。

「同じ事は二回はしませんわよ。分かりましたわね」

「……独り言？ 白鷗」

俺がそう声をかけると、白鷗は息を詰めて勢いよく振り向いた。振り返った彼女は、驚いているような、焦っているような不思議な表情をしている。

「チャート……いつからいましたの？ 覗き見は下品ですわよ」

その顔はすぐに無表情に変わって、彼女の紫の眼が俺を睨む。

「ごめん、今さっき、だけど……何かあった？」

「もう、誰かさんが貯蔵庫引っ掻き回したお陰で、探し物が見つからなくて苛々してますのよ」

「……それで独り言？……老けるよ」

「うるさいですわね……余計なお世話ですわ！ 私はまだまだ現役ですわよ」

そう言って白鷗は、傍らに置いていた木箱を一つ抱えて、俺の横を早足で通り過ぎる。

木箱を両手で持っているからか、ドアを閉めずにそのまま倉庫を出て行く。

その背に、何となく声をかけづらくて、俺は無言のまま彼女を見送った。

スターフィッシュレッドの廊下

私は重く息を吐いて、段々不機嫌になる自分に気付きながらも歩き続けていた。

長く続く灰色の廊下。中央に薄い黒色の絨毯が敷いてあるから、靴音は立たない。

けれど私はあえて石の床の上を歩いていた。

ブーツの踵がこつこつと高い音を立てる。それが気持ち良い。

キアノスさんと横に並んで通っても随分広い廊下だった。五、六人くらいは並べるんじゃないかと思う。

帝都の中心に位置する王居。

軍部とも言う。――私たちにはその方が馴染みがある。

五階建ての軍部の三階、暗殺隊の部屋のある場所。

帝国軍は大きく分けると、正規騎士隊と暗殺隊の二つになる。

正規騎士隊はちゃんと隊長みたいな人がいて、戦が起こったら隊ごとに出動、という感じらしい。

騎士隊に知り合いなんていないから、詳しいことは良く分からないし、興味も無い。

表立って動くことのない、私たちみたいな暗殺隊の人間は、二人一組でペアになっていることが多い。

一人が怪我とかで動けなくなった時、もう一人が報告に戻れるように。

普段は一人で、任務ごとに色んな人と組む、っていう人もたまにいるけれど、基本的に一度組んだペアは変わらない。

戦いのスタイルとか、術の相性とか、そもそも性格が合う合わない

とかで分けられて。

大体は、通称——ペアの名前——みたいなものがつけられる。自分たちでつけることも多いけど。

私たちは、『黒夢』。

『陽炎』とか、他にいくつかのペアがいるはずだけど、

私は詳しくない——こっちも興味がなから、良く知らない。

そういうのはキアノスさんが詳しい。

そうやって考えると、私とキアノスさんってバランスが取れたペアだと思うんだけど。

「ああ……うう……」

「奇妙な声を出しながら歩くな……」

「もー、眠いし日焼けするし最低ですよお」

はあ、と私は溜息を吐きながら歩く。溜息と同時にへにやり、と背筋が曲がる。

ふと横を見るとキアノスさんはいつも通り背筋を伸ばした綺麗な姿勢で歩いていて、何だか少し悔しくなった。

悔しくなったから、少しだけ姿勢を良くしてみる。

「そもそもお、黒羽さまや総帥がお昼間から軍部にいるはずが無いですう」

この国の一番偉い人がヴェイン総帥。その総帥の補佐——懷刀。片腕。

まあ色んな言い方はあるけど、そんな位置にいるのが黒羽さま。

一応、黒羽さまが私たち暗殺隊の人間のトップっていう事になって

いる。

さま、とかトップ、とか言いつつ皆バラバラに動いているから余り意味はないのだけれど。

「……どこを見て言ってるんだ」

ふう、と息を吐いたキアノスさん、その黒い瞳が見据える先。

同じように私もそちらを見ると、長い金の髪を背に流した女の一人、窓際に佇んでいた。

僅かに俯いている。窓の外を見ているようにも、見える。

「……あれ。黒羽さま」

「いるじゃないか」

「……貸しか、もう十二、三くらいはあるんじゃないのか」

「黒羽さまあゝ……お話中ですかあ？」

私が声をかけると、何か小声で呟いていた黒羽さまはゆっくりとこちらを向いた。

青い瞳が、真っ直ぐに私を捉える。

黒羽さまは、こうやって、相手をじっと見て話す。目を逸らすことが無い。

私は逆に人の目を余り見ないから、この瞳が苦手だった。

どうしてだかは分からないけれど、見返すことが出来なくて、いつも目を逸らしてしまう。

「……何か用か、『黒夢』」

ぶっきらぼうな問いかけ。

この人はいつもそうだ。一度気になって、殆ど、丸一日と言って良いくらい観察していたことがあるけど、それでも黒羽さまが笑っている所は見られなかった。

笑っている、どころじゃない。この無表情が崩れたのを見たことが無い。

「昨日の報告ですよ、一応」

「それなら要らん。結果はもう届いている」

「総帥にはお話しなくていいんですかあ？」

「私から伝えておく」

その言葉を聞いていたのか、いなかったのか、キアノスさんは黒羽さまから視線を外して、

少し遠い所――廊下の先を見ていた。

何となく気になって、私もその視線を追って廊下を見遣る。

黒羽さまは気付いていたのか、キアノスさんから視線を外しはしなかった。

「……こんな廊下でどうしたね？黒羽、『黒夢』」

低い声が、重く響いた。

レンズが一つだけの片眼鏡。その奥で細められた青い瞳。

柔らかく、完璧に浮かべられた作り笑い。

ゆったりと、服の裾をなびかせて歩く姿は、総帥と呼ぶに相応しい雰囲気だった。

「……総帥」

「昨夜の報告かね？」

「はい」

「ご苦労。昨夜の任務は急で悪かったね」
「いえ」

キアノスさんが短い言葉で総帥に報告する。
その間、私はぼんやりと窓の外を見ていた。総帥のことは尊敬して
いない訳じゃない、でも苦手だったから。
黒羽さまの瞳と同じで、理由は分からないけれど。

さつき黒羽さまが話しかけていた窓の、外。
きつとあの時は誰かがいたのだろうけれど、今は誰もいない。

「……スート」

「あ、はい、何ですかあ？ 私報告下手ですよお」

「もう終わった。帰るぞ」

「……んっ？ もう良いんですかあ？」

そんなに長い間、私は窓の外に集中していたんだろうか。
気付いたら、キアノスさんが怪訝そうに私を見下ろしていた。
総帥の姿も、黒羽さまの姿も、もう無い。

「ああ。仕事も貰わなかったしな。今日明日あたりはゆっくりでき
そうだ」

「そうですかあ？ じゃあ久しぶりにデートに行きたいですう」

「……久しぶりも何も行った事は無いと思うが」

「それはそれ、雰囲気ですう。ムードがないですよおキアさん」

後は帰るだけだからか、少し気が楽になった私はいつも通り軽口を
叩きながら。

ついさつき通った絨毯の上を再び通る。

――後は帰るだけだから。

なのに。

思わず、足を止めた。

キアノスさんの驚いたような声が耳に届く。

「……『陽炎』」

その単語が聞こえた瞬間、私の中で何かのスイッチが切り替わった。だから、行きたくないって言ったのに。

一瞬躊躇って、無理矢理顔を上げた。

本当は背を向けて走り出したいけれど、残念なことに『陽炎』のいる方が出口への道だからできない。

「『黒夢』か、日の昇っているうちから、珍しい」

「それはこっちの台詞だ」

金髪の男の人と、その数歩斜め後ろに深緑色の髪をした男の人が居る。

――私たちが『黒夢』と呼ばれるように、『陽炎』と呼ばれる二人。私たちと同じ、剣士二人組みのペアだ。これ見よがしに、二人とも腰から剣を下げている。

気付けば、私はその二人を強く睨んでいた。

気付いてもやめるつもりは無いけど。

心の中がざわざわと落ち着かなくて、苛々する。

「お前達も大変だね、こんな真昼間から動いてるのか、雑用に」

「滅多な口を利くな」

「事実だろ？」

口の端で笑って、キアノスさんが深緑色の髪の人——確か名前はシラーとか言った——を見上げた。

彼は背が高い。キアノスさんと頭いくつつ分違うんだろう、なんて考えていたら不意に金髪の方の人と目が合った。

「何ですか」

「いや……」

ぼんやりとした口調。そういえばちょっと足元も覚束ない。

疲れている、というより眠そう。

目が合ったというのは私の勘違いだったようで、ふらふらしてる彼の目はきっちり閉じられている。

……立ったまま、寝てるのかなあ。

時折がくんと大きく揺れるのは、眠りから現実に引き戻されてる証拠。

「……おい、クロス」

「なんだ」

「寝るな」

「気にするな、ねてない」

「下らない嘘を吐くな」

「なら正直にいうが。限界だ、いますぐ帰って横になりたい」

「ふざけるな」

そんな言い合いをしながら、金髪の——クロスさんは目を閉じたままふらふらしている。

寝てると寝てないの違いって、どこからなんだろう。

「……ああ、そういえば、その天才は昼、弱いんだっけ。
盲目の目に陽光が辛いのか？」

「……。」

キアノスさんの言葉に、クロスさんは肯定するでも否定するでもなく。

がくん、と一度大きく揺れて、キアノスさんと話す為に斜め前に出
ていたシラーさんの背中に顔を突っ込ませた。

……眠いなら、寝れば良いのに。

「目、見えてないんですか」

「クロスは盲目だ」

「そ……目、閉じてるの、眠いからだと思っちゃいました」

「……いや、寝てるぞこれは」

「大丈夫だ、ねてない」

何だか少し、どうでもよくなった。

変に構えていた自分が阿呆らしくて、薄く笑う。

「あー、分かりましたあ、寝てませんけどお、起きてませんよね
え？」

クロスさんが背中に顔を突っ込ませているせいで、シラーさんは微
妙に前に傾いだ体勢をしている。

その不安定な格好のままクロスさんへ視線をやって。

「クロス……おい、帰るぞ」

背中からの返事はない。

「帰るぞ」

「……すまん聞いていなかった。もう一度いえ」

「稀代の天才も昼はこれか……何ていうか、二重人格か？ある意味」

口元に笑みを浮かべたまま呟くキアノスさんの横で、私はシラーさんを睨んでいた。

盲目の彼を睨んだって仕方が無いことは今分かったから。

シラーさんと眼が合ったけれど、すぐに彼の方から目を逸らした。

私はそのまま睨み続ける。

自分から目を逸らさなかったのは、これが初めてかもしれない。

二人が背を向けて、私たちとは反対の方向に歩き出しても。

その背中が長い廊下の先に消えるまで。

「……そんなに嫌いか？あいつ等」

「その質問、家で聞きましたよお？」

「そうだな」

にこりと綺麗に笑ってみせたら、キアノスさんは一つ溜息を落とした。

納得のいかない顔をしている。

——まあ、そうだよ。私もキアノスさんが同じ事をしたらきつと、凄く不思議がる。

「まあ良い、帰るか」

「ねえキアさん、ほんとにデート行きましようよお」

「行かない。休ませてくれ」

「そんな疲れたパパみたいなこと言っちゃ駄目ですよお！」

キアノスさんの片腕にしがみついて言う。溜息を吐かれるかと思っ
ていたんだけど、
意外にも聞こえてきたのは小さな笑い声だった。

「……デートって、どこに行くつもりだ？真夜中に強盗でもするの
か？」

「失礼ですねえ！半分しか当たってませんよお！」

「強盗か？」

「真夜中の方ですう！」

むくれてそう言うと、キアノスさんはさっきよりも大きく笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4963n/>

渉り鳥

2010年10月9日16時03分発行